勇者アルスくんの冒険

八草　頼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者アルスくんの冒険

【Ｎコード】
Ｎ７３７１Ｙ

【作者名】
八草　頼

【あらすじ】
それはアルスが十四歳になる誕生日の事でした。今日は彼がお城に行く日です。しぶるアルスにお母さんは言います。「ちゃんと行って来たらＰＳＰ買ってあげるわよ」ＰＳＰにつられてお城にやってきたアルスに王様は言います。「アルスが次のレベルになるには、３６０００ゴールド必要じゃ」　※ファンタジーワールドかと思いきや割とそうでもない不条理でバカすぎるシュールギャグコメディです。

旅立ちの日

それはアルスが十四歳になる誕生日のことでした。

「おきなさい、おきなさい、わたしのかわいいアルスや……」

ベッドですやすやと静かな寝息をたてる少年アルスに、彼の母アンナはやさしく声をかけます。

ですがアルスはなかなか目を覚ましません。そこでアンナが上半身のバネを使いボディーブローを二発決めると、ようやく眠りからさめたようです。

「……あ、おはよう。知的に優しく優雅で薄汚く天女のように清らかでいてかつ美しく上品な醜いお母様」

「処女のようにみずみずしい、が抜けてますよアルス。あとところどころ悪口が混ざっているのは母さんへの反逆とみなしていいのかしら？」

「母さんがその方が喜ぶかと思って、僕なりに考えてアレンジした結果です」

「あら、そうだったの。うれしいわぁ、アルスがそんなに母さんのことを考えてくれたなんて。でも次言ったら泣かせるわよ」

アルスはとても頭のいい子なので、教えられたことをただこなすだけではないのです。

ただ今回はどうやら裏目に出てしまったようです。

「アルス、今日はあなたにとってとても大切な日です」

「えっ？　何の日だっけ」

「今日は十五年前お母さんが処女を喪失した日です」

「僕には全く関係のない話の気がするけど……」

「それがあるのです。まさか一発ではらむなんて……」

「母さんの年齢を２５と仮定するとなんかおかしい気がするなあ」

アルスは母の正確な年齢を知りません。とりあえず２５ということになっています。

「はっ！　今のは聞かなかったことにして！」

「ええっ！？　……わ、わかったよ」

アルスは聞き分けのよい子です。というか嫌な予感がすると、すぐに流してしまうのです。

「というのは冗談で、今日はあなたがお城に行く日です。私は今日この日のためにあなたをゆうかんな男の娘として育てたつもりです」

「娘？　僕男の子だけど」

「そのせいかかなりショタっぽく育ちましたね。前の魔王はふたなりが苦手だったのでそれを狙いました」

「困ったなあ、母さんがなにを言ってるかわからないぞ。あとでググってみよう」

「それには及びませんよ。それはつまりこういうことです……ゴニョゴニョ」

アンナはアルスに教育をほどこします。彼女はアルスの疑問をすぐに解決してくれる、素晴らしい母親なのです。

「な、なんだよそれ！　そんなの普通苦手でしょ！？　好きなのは一部の変な嗜好の人だけじゃないの！？」

さすがのアルスも驚きを隠せません。

「アルス、お父さんの悪口を言うのはやめなさい！」

「ええっ！　怒られた！？　と、父さんがまさか……、どういうこと！？」

「そんなことはどうでもいいからさっさとお城に行ってきなさい！」

母は急に怒り出しました。まるで嫌な思い出があったかのようです。

今回はアルスもさらりと流すわけにはいきませんでした。

「どうでもよくないって！　すごいひっかかってるよ、喉に小骨が

！　いや、アンカーぶちこまれた気分だよ！　このままじゃどこにも行けないよ！」

「しょうがないわねえ……。じゃ、ちゃんと行って来たらＰＳＰ買ってあげるから」

「え？　ほんと！？　うわーい、やったぁ！　じゃいってきまーす！」

「王様にちゃんとあいさつするんですよ～」

こうしてアルスは意気揚々とお城に向かいました。

旅立ちの日（後書き）

こまかいツッコミはなしでお願いします。このお話はこういうノリです。

王様に会います

お城にやってきたアルスを王様が迎えます。

「よくぞきた！　ゆうかんなるアレルのむすこスメシよ！」

「王様、僕はアルスといいます。そんな握ったりちらしたり巻いたりするやつじゃありません」

「ゆうかんな勇者であった父の後を継ぎ旅に出たいというそなたの気持ち、しかと受け取ったぞ！」

「いえ、父さんはふたなり好きの変態だということがさっき判明しました。それに僕はＰＳＰでモン〇ンをやる予定なので旅には出ません」

アルスはそう言いましたが王様はまったく聞く耳持ちません。ちょっと横文字が入るとてんでダメなのです。

僕も大人だし、しょうがない付き合ってあげよう、とアルスは老人ホームに手伝いにやってきた中学生のような気分で相手をすることにしました。

「見事魔王を倒したあかつきには、わが娘ミリア、三十八歳独身をおぬしの妻とする事を許そう」

「いえ、許さなくていいです。そこは禁止のままにしておいてください」

「まあそう恥ずかしがるでない。のうミリア」

王様の隣ではメガネをかけたブタさんが、生意気にも服を着ていました。

「えー、まあこの際文句は言わないけどぉー、まだ子供じゃん？背も全然低いし～」

「よかった～、子供で」

「まあパパがどうしてもって言うなら考えなくもないけど～？」

「王様、僕のことは気にしないでください」

「ミリア、このとうりじゃ！」

「やめろジジイ！」

娘に頭を下げる王様に、温厚なアルスも声を荒げます。ですが許してあげてください。彼にも人生というものがあります。

「これ！　王様に対してその口の聞き方はなんだ！」

そこに大臣がやってきました。

「あ、ごめんなさいつい……。やっぱり人生がかかってくると熱くなってしまって」

「ミリア様となど畏れ多い。代わりにわたしの娘ローラをやろう。ローラ、来い！」

呼ばれて出てきたのは長身の女性。かなりの美女です。

「僕、やります。魔王をひねりつぶします」

「そうかそうか。ローラは男だがこの際問題ないだろう」

「やっぱナシの方向でお願いします」

アルスは父と違いいたってノーマルです。ただしどちらかというとロリ顔で貧乳、ツインテールにニーソックスは鉄板だと思っています。

それにツンデレが大好物です。自分はSだと公言してはばかりませんが実はドMです。そんな彼が、果たして本当に勇者になれるのでしょうか。

王様のおくりもの

「わしからの贈り物じゃ、そなたの横にある宝の箱を取るがよい」

たしかにアルスの横には不自然に宝箱が転がっていました。

アルスは宝箱を拾い上げます。ですが宝箱にはカギがかかっていました。アルスは宝箱を投げ捨てました。

「いらぬと申すか。ならその代わりにひのきのぼうとミリア、もしくはドラゴンキラーのどちらかをやろう」

「……うーん、悩むなぁ」

アルスは二秒で答えが決まっていましたが、悩むそぶりを見せます。彼はほんとうに賢い子です。

「ここは涙をのんでドラゴンキラーにします」

「ミリアを捨ててまで魔王を倒す力を欲するというのじゃな。……うむ、その心意気、あっぱれ！　ついでにミリアもくれてやろう」

「いらねーよ！」

「貴様、王様になんと言う口を！」

大臣がすかさずキレます。アルスはこのくだりさっきもやったな……、と思いつつも素直に謝ります。

「ごめんなさい。棒とセットで渡されたら撲殺してしまいそうだったので……」

「うむ、それもそうか。なら代わりにローラをやろう」

「い、……いりません」

アルスは一瞬迷いましたが、父と同じ道を歩むわけにはいきません。あとさりげに大臣がすごい暴言を吐いたな、とも思いました。

結局アルスはドラゴンキラーだけで勘弁してもらいました。

「とはいえアルスよ、おぬし一人ではすぐに魔王退治に飽きてしまうかもしれぬ。街の酒場で仲間を見つけ、これで装備を整えるがよかろう」

チャリーン。王様はオーバースローで５０ゴールド投げつけてきました。なかなかの強肩です。

「そしてこの部屋にいる兵士に聞けば旅の知識をおしえてくれよう」

ものすごいなげやりです。でもこれは本当にドラ〇エの王様も言ったセリフなのです。

「では行け、アルスよ！　魔王を倒してまいれ！」

一方的に王様はアルスを旅立たせようとします。もう王様は眠くなってきていたのです。

「はいっ、行ってきまーすっ」

アルスは適当にいい返事をして流します。彼はさっさと帰ってモン〇ンをやる気バリバリでした。

彼の当面の敵は魔王ではなくリ〇レウスになるのかもしれません。

仲間を求めます。

アルスはお城を後にすると速攻で帰宅しました。

「母さんただいま！　ＰＳＰは！？」

「あら、おかえりなさい。安心して、さっきアマゾンで注文しておいたわ」

「ホント？　ホントだよね！？」

「本当よ。本当だからその物騒な武器を突きつけるのはやめなさい」

アルスは興奮のあまりドラゴンキラーを母親の喉元に突きつけていました。あわててひっこめます。

「まだ届くまで時間がかかるでしょうから、その間に酒場に行って仲間を見つけてらっしゃい」

「はぁ～い」

ＰＳＰのことになるとやたら聞き分けがよくなるアルスは、意気揚々と酒場に向かいました。

◆　◇

酒場についたアルスは、ナイスバディな受付のお姉さんにさっそく仲間を紹介してもらうことにしました。

「ロリ顔で貧乳、ツインテールにニーソックス装備でかわいい系のツンデレ魔女っ子をお願いします。レベルは問いません」

アルスはためらうことなく正直な願望を口にしました。

「うーん、その条件だと三人ね。９歳と１４歳と４５歳。どれがいいかしら」

アルスは悩みます。

本当はすぐにでも９歳と叫びたかったのですが、彼にも一応勇者としての体裁があります。ロリコン勇者の通り名はまだ荷が重すぎるのです。

それに４５歳も逆に見てみたい気がしました。アルスは勇者になってはじめての壁にぶちあたったのです。

「じゅ、１４歳で」

「あら、そう。ちょっと待っててね。うふっ」

妖しげなウインクを一つすると、お姉さんはどこかに魔法電話をかけだしました。

アルスはわくわくしながら待ちます。さながら風俗の待合室気分でした。

◆　　◇

「はろー、アルス」

しばらくしてやってきたのはアルスの幼馴染のリリアでした。

なるほど言われてみればたしかに条件を満たしてはいますが、彼女はアルスを勇者として、いやときおり人として見ていないようなふしがあります。

同い年の１４歳をえらぶ時点で少しはかんぐるべきでした。

「チェンジで」

ドスッ！

チェンジコールむなしくアルスはおなかに痛みを感じたかと思うと、いつしかその場にうずくまっていました。

さらにその背中を足で踏まれています。ですが少し興奮しているのも事実です。顔を伏せながらもきわどくひるがえるスカートを盗み見ていました。

そういえば彼がＭに目覚めたのもこの子が原因なのかもしれません。

「誰をチェンジだって？」

「ご、ごめんなさい。許して。僕はリリアちゃんを危険にさらしたくないんだよ」

と適当な理由をつけます。

いくら彼の性癖にドンピシャだとはいえ、やっぱりずっと一緒にいるのはキツイのです。アルスはこれまでに何度教会送りにされたことでしょうか。

「……あ、あたしだって、あんたが心配でここに登録したんだから。……ツインテールとニーソックスを指名してくると思って」

さすが、きっちりデレを決めてきます。ですがこの安いツンデレはアルスとっては鼻で笑ってしまうレベルなのです。

「くふっ」

あっと、思わずばかにした笑いが出てしまいました。

「なに笑ってんのよオラァッ！」

ズシャッ！

アルスの延髄にかかと落としが決まりました。動画にとっておきたいぐらいキレイに決まりました。

アルスは力つきました。

また王様に会います。

「おお、アルスよ、死んでしまうとは情けない」

力つきた勇者アルスの転送先は教会ではなく王様の元になっていました。アルスはこれから何度このセリフを言われるのか想像しただけで欝になります。

「聞けば酒場で女子のスカートを覗こうとしたとか。早くも勇者の片鱗を見せてきたようじゃな」

周囲から笑い声が聞こえます。

アルスはパンティではなく見えそうで見えないギリギリにこだわったと言いたかったのですが、変態性が増すかもしれなかったのでやめました。

「さて、アルスが次のレベルになるには、３６０００ゴールド必要じゃ」

聞いてもいないのに王様はかってにしゃべりだしました。ですがこれぐらいしか仕事がないのです。

「お金取るのかぁ……。すごいなあ、汚いおっさんだなぁ」

アルスは王様の外道っぷりに感心しています。一人だけ資本主義に走っても、王様ならなにをしても許されるのです。

「アルスはどうやら防御面に不安があるようじゃ。これで身を守るとよい」

王様はどこからか取り出した盾を目にもとまらぬ速さでフリスビーのように投げつけてきました。

空を切りさく音とともにズガァッとすごい音がして、盾が柱にきささります。

アルスは柱にめりこんだそれを引っこ抜きました。なんとクリスタルの盾です。

これは高い防御力を持ち炎や吹雪にも強く、魔法にも耐性があるというすばらしい盾です。

王様のすさまじいツンデレ具合にアルスは強く心を動かされました。

リリアちゃんもこのぐらい見習って欲しいなあ、とぼやきながら、再びアルスはお城を後にしました。

◆　◇

「あっ、アルス〜！　だいじょうぶだった？」

お城の入り口でリリアがアルスを待ち構えていました。

「まったく、リリアちゃんのせいでハジかいちゃったじゃないか！」

「ごめんね、許して？　怒らないで、おねがいっ」

リリアは上目づかいにアルスにすりよってきます。いつものパターンですが、アルスはリリアにかわいくお願いされると弱いのです。

なぜならリリアの見た目はとてもかわいいのです。アルスも彼女から学校の男教師の視線が怖いと何度か相談されたことがあります。

「し、しょうがないなあ……。もうホントに気をつけてよね」

「ありがとっ。アルスってやさしいから好きよ」

にこりと笑うリリアにアルスはどきりとします。彼もなんだかんだいってベタなのが好きなのです。

「んでさあ、それなに？　そのキレイな盾」

露骨に変わるリリアの態度にアルスはものすごくテンションが落ちました。ですがこれもいつものことなのです。

「こ、これは王様にもらったんだよ。これで『僕の』身を守りなさいって」

アルスは「僕の」と強調します。あらかじめ自分のものであることをはっきりさせておくのです。

「ふ～ん。ねえ、ちょっと貸してみてよ」

「え、いやだよ」

「ちょっと見るだけよ」

「だからいやだって」

「貸せ」

「はい」

アルスは盾を献上します。これ以上ねばると手刀が飛んでくるのは過去の経験上あきらかだったからです。

盾で身を守ろうとも考えましたが、なぜでしょうアルスの頭にはクリスタルの盾がリリアの打撃によって粉砕される映像が浮かび上がりました。

「うれしいなあ〜、アルスがあたしにプレゼントなんて」

アルスはクリスタルの盾を奪われました。ですがこれもまた、いつものことなのです。

再び仲間を求めます。

アルスは仲間集めを再開すべくふたたび酒場へとやってきました。こんどはリリアも一緒です。

「ロリ顔で貧乳、かわいい系のツンデレ魔女っ子をお願いします。レベルは問いません」

アルスはしょうこりもなく受付のお姉さんにリクエストします。ですがこれでも彼なりに妥協したのです。

「ねえ、あなた。もう魔法使いが仲間にいるじゃない。それだとパーティのバランスが悪くなっちゃうわよ？」

「僕の仲間はバトルマスターしかいませんけど？」

「誰がバトルマスターだって？」

アルスはリリアに右腕をねじり上げられました。

「さ、さっきの9歳の子をお願いします、9歳の子を！」

ギリギリと締め上げられつつもアルスは叫びます。

「ごめんなさいね、その子はもうほかのパーティに入っちゃったから」

「そ、そんな！」

はじめから素直にそう言っておけばよかった、と後悔してもすでに後の祭りです。

「9歳の子ってなにかしらぁ？　くわしく聞かせてほしいわねぇ！」

「ぎゃあああ！」

人間の腕というものはこうもねじれるものなのでしょうか。あたりにアルスの悲鳴がひびきわたります。

「おい、ちょっとうるさいぞ君達！」

見かねて注意したのは勇者カールでした。じつはアルスのほかにも勇者はわりといっぱいいます。

いくら王様がもうろくしているとはいえ、さすがにアルスのようなクソガキ一人に世界の命運を託しているわけではありません。

「あっ、ご、ごめんなさい。ほらアルス、謝りなさいよ、あんたのせいでしょ！」

「大変申し訳ございませんでした」

理不尽な要求ですがもうなれっこです。すでにアルスの謝りスキルは一流ホテルの支配人レベルにまで達しています。

「まったく、こっちは遊びでやってるんじゃないんだよ？　君達みたいな子供はおとなしく家でゲームでもやってなさい」

「はい、そうするつもりです」

本当にそうするつもりだったのでアルスはよどみない返事をしました。

ですがリリアがこそこそとアルスに耳打ちします。

「ちょっと、あんなふうにいわれて悔しくないの？　あんたももう勇者になったんでしょ？」

「ぜんぜん。むしろなんで僕が勇者なのかさっぱりわからないし」

「それは、あんたがあのアレルおじさんの息子だからでしょ！」

「……なに？　アレルだと？」

勇者カールがそれを聞きつけます。それどころかリリアの声は酒場中に届いていました。

「あのガキがアレルの……」「まさか……ということは」「バカな……、信じられん」

部屋中にどよめきがおこり、なにやら雲行きが怪しくなってきました。

そんな中アルスは、ＰＳＰがいつ届くのか気になっていました。

決闘を申し込まれます。

「小僧、アルスとか言ったな！　表に出ろ！　決闘だ！」

「望むところよ！　本物の勇者の力、見せてあげるわ！」

カールとリリアがヒートアップし、勝手に話がすすんでいきます。アルスはその間、ひたすらすみっこの酒樽をながめていました。

彼はモブキャラのふりをしているのです。

「おい、決闘だってよ！」「アレルの息子らしいぜ！」「え？　あれ女の子じゃないのか？」

「えっ、あたしは違うわよ！　ほら、アルス！」

「武器や防具はそうびしないと意味がないよ！」

アルスはモブキャラらしいセリフをはいてごまかそうとしますが、えりくびをリリアにつかまれ外に引きずり出されました。

いつの間にか外には人だかりができていました。相手のカールはすでに剣をぬいて戦いの準備は万全です。

「いい？　アルス、ジャブでけん制しつつインファイトで戦うのよ。ショート、ショートで空振りを誘って懐にもぐりこむの。後半はきっとスタミナ勝負になるわ」

リリアのアドバイスは難しくてアルスにはよくわかりません。

「なんで僕素手で戦うことになってるの？　相手剣持ってるんだよ？」

「だからなに？」

「だからすごく不利なんだよ！　危ないんだよ！　ならリリアちゃん、せめてさっきの盾返してよ！」

「え？　返すとかそういうことじゃなくない？　ていうか盾とかそういうのいらなくない？」

そうです。すでにクリスタルの盾はアルスのものではないのです。

「いるよ！　もういい、知らない！　僕もう帰る！」

「あっ、待ちなさいよ！」

アルスはそう言ってその場を逃げ出します。ですが人だかりをつっきろうとした彼の前に、何者かが立ちはだかりました。

「アルス。どこへ行くのかしら？」

「あっ、ＰＳＰ！」

行く手をふさいだのは彼の母のアンナでした。

「お母さんはＰＳＰではありません。あなたの中でお母さん＝ＰＳＰという図式ができあがっているのかもしれませんが、今度言ったら髪をつかんで引きずり回しますよ」

「ご、ごめんなさい。でも僕は決闘なんて……」

「言っておきますが逃げたらもちろんＰＳＰはおあずけです。それとあなたのＰＳ３を初期化します。念のため二回初期化します」

「そ、そんなぁ！　せっかく集めた僕のトロフィーが！」

容赦のないアンナの発言に、さすがのアルスも逃げられなくなってしまいました。

「アルス。忘れ物ですよ」

アンナはアルスが家にほうり投げていったドラゴンキラーを持ってきていました。

「あっ、やった！　それがあれば僕だって……」

ですがアンナはアルスを素通りし、カールにドラゴンキラーを渡しました。

「ちょっとなにしてるの母さん！」

「獅子は子供をマグマ煮えたぎる火口に突き落とすものです」

「それ這い上がれないよ！　落ちた時点で絶対死ぬから！」

「ちなみにドラゴンキラーはあなたの弱点です。斬りつけられたらそれはもうズバズバいくと思います」

「僕ドラゴンじゃないんだけどなんで弱点なのかなあ。不思議だなあ！　でなんでそれを渡しちゃうかなあ！」

「さっすがアンナおばさん！」

「リリアちゃん共感しないでよ！」

「あら、リリアちゃん。今日は魔法使いさんの格好かしら？　可愛らしいわぁ。いつ私の娘になってくれるのかしら」

「やぁだ、おばさんったら～、ほら、アルスもなんとか言いなさいよぉ」

リリアはバンバンとアルスの背中を叩きます。その強烈な衝撃に「う、うげっ」とアルスはただえずくばかりです。

「大丈夫！　アルスならきっとやれるわ！」

リリアはアルスに向かって親指を立てます。「負けたら後で屋上こいよ」のサインです。

「アルス……。あなたと過ごした１４年間、楽しかったわ。顔をもっとよく見せてごらんなさい」

「勝手に死亡フラグみたいの立てないでよ！」

ビシィッ！　アンナは思いっきりアルスの頬を張ります。それはもう、意識が飛びかけるぐらいの一発でした。

いや、本当は一回飛びました。飛んでなんとか戻ってきました。

「な、なにするんだよいきなり！」

「今のであなたの封印を解きました。アルス、まさに今あなたは勇者として真の力に覚醒したのです」

「ええっ！？　全然、何も変わってないよ！？」

「いいですか、今回は特別に右手を使う事を許可します」

「まさかのハンデ！？　ていうかいままで使っちゃダメだったんだ！？」

「右手以外を使ったらあなたのメモリーカードをセーブ中に抜き差しします」

「それやっちゃダメだって！　やめてよホントに！」

アルスはもう後には引けません。セーブデータを消されるのは彼にとってその身を引き裂かれるも同様です。

アルスはなかばヤケになりカールへと向き直りました。もう戦うしか道はありません。

いきなり決闘です。

「ほらぁ、ごちゃごちゃやってないでさっさとかかってこいぃ！」

はからずもドラゴンキラーを手に入れたカールはノリノリでした。

えらそうな口をきいていましたが実は彼も鉄の剣を買うのにヒイヒイ言っているレベルなのです。

「そっちこそさっさとその剣でアルスをズタズタにしなさいよ！」

「リリアちゃんへんな煽りかたしないでよ！」

「そんな口をきいて後悔するなよ小僧……行くぞっ！」

「僕じゃないって！」

ザザッ！　カールが一気に間合いをつめてきました。もう二人の体は手を伸ばせば届く距離です。

カールは振りかぶったものものしい剣を、アルスの脳天めがけて落とします。子供あいてに情け容赦のない一撃です。

これではまちがいなくアルスは頭をカチわられ、力つきてしまうでしょう。

アルスは心なしか相手の動きがスローモーションのように見えます。これは死ぬときのあれか、とアルスは思います。

ですが……。

ばしっ！

アルスの右手がすんぜんでカールの剣をもつ腕をはらいのけました。ドラゴンキラーは空高くはじきとばされ、やがて地面につきささりました。

「うおおおっ！　すげえ！」「なんだ、今のは！」「片腕で弾き飛ばしたぞ！」

観衆からおどろきの声が上がります。アルス自身もまた、おどろきを隠せません。

「す、すごいじゃないのアルス！」

リリアが走りよってきました。いきおいでそばにいたカールを蹴りとばします。カールはゴロゴロと転がっていきました。

「う、うん。なんだかわからないけど相手の動きがゆっくりに見えたから、右手で押しのけようとしたら……」

と、アルスはリリアの手元に視線がいきます。その手にはいつのまにかドラゴンキラーが握られていました。

「リリアちゃん、それ、もしかして僕のために……？」

「え？　これ？　これ拾ったの。さっきあたしが。で、なに？」

「ですよねー」

リリアのもとにドラゴンキラーとクリスタルの盾が集まりました。本来ならどちらもアルスの持ち物でしたが、もとからこうなる運命だったのです。

「あっ！　アルス危ない！」

リリアが叫びます。その時アルスの背後から、走ってきたカールがその後頭部めがけて鉄の剣をふりおろしたのです。

ばきぃっ！

アルスの頭に打ち付けられた剣は、なんと真っ二つに折れてしまいました。

「ば、バカなぁああっ！　ボクの鉄の剣がぁーっ！」

絶叫するカール。またもや周囲からどよめきが起こります。

「あれ？　どうしたのみんな？」

当のアルスは気づいてさえいません。リリアはすぐにアルスの無事を確認します。

「アルス大丈夫！？　なんともない！？」

「え？　……あ、うん。ね、ねえ、リリアちゃん、やっぱそれ返して！　それはもとはといえば僕が王様からもらったんだから！」

ドラゴンキラーとクリスタルの盾がそろったのを見て、そのかっ

こよさにうらやましくなってしまったアルスは勇気を振りしぼってリリアに詰め寄ります。

「は？　ふざけてるの？」

さっきはあんなに気遣ってくれたのに、リリアはモノが絡んでくるとうってかわって冷たいです。

「ふ、ふざけてないよ！　僕だってもう勇者なんだから、そうそうリリアちゃんの言いなりにはならないよ！」

そうです。アルスは勇者になったのです。彼の勇気がいま、試されようとしています。

アルスは剣と盾を奪い返すべくリリアに挑みかかりました。

「あ、ち、ちょっと！　なにすんのよ、やめなさいよ！　っとと、きゃっ！」

アルスの急接近にリリアがバランスをくずして後ろに倒れこみます。

リリアがとっさにアルスの腕をつかんで体制を立てなおそうとしましたが、アルスもそのまま前方に引っぱられてしまいました。

どさぁっ！　と二人が地面に倒れます。

思わず目をつぶったアルスの視界は真っ暗でしたが、顔全体にふにゅっとかすかにやわらかい感触が伝わります。

彼が顔をうずめていたのは、リリアの胸もとでした。

「き、きゃあああああっ！」

リリアは倒れた衝撃から立ち直ると、すぐに大声を上げます。

と同時に上におおいかぶさるアルスの股間を蹴り上げ、どうやったのかはわかりませんが一瞬で上下を入れ替えて、マウントを取りました。

その後に待っていたのは、見るも無残な光景でした。

鉄の剣を無防備な後頭部にくらってもまったくダメージを受けなかったアルスは、リリアのわずか二発の殴打で力つきてしまいました。

いきなり決闘です。（後書き）

アルスは本当に強いです。ですがリリアも強いのです。
それは次回で。

またまた強制送還です。（前書き）

なるべくキリがいいところで分けたいので、毎回分量にバラつきがあります。すいません。

またまた強制送還です。

「おお、アルスよ、死んでしまうとは情けない」

例によって王様の前です。アルスは復活しましたが、リリアに対する恐怖心はよりいっそう強いものとなっていました。

「王様、僕は無力です。この先リリアちゃんに虐げられて生きていくのかと思うと」

思わず王様に弱音を吐いてしまいました。そんなアルスを見て王様は優しく語りかけます。

「アルスが次のレベルになるには、リリアの脱ぎたてパンティが必要じゃ」

王様はまた無茶を言います。アルスにとって魔王を倒すよりもはるかにハードルが高いとさえ思えます。

ですがそれを手に入れる事ができたら確かに人として次のレベルに上がるだろうなぁ、とアルスは感心しました。

「王様、僕にそんなレアアイテムを入手することは不可能です。どんな状況でそれを手に入れることができるのか、全くビジョンが見えません」

「そうか、ならこれを使うとよい」

王様は例によって何か投げつけてきました。風を切りさき目にも

とまらぬスピードで飛ぶなにか。

それはストッとアルスの足元につきささります。

アルスがおそるおそるそれを手にすると、なんと一万ゴールド紙幣でした。

そうか、そういうことか。聡明なアルスは王様の意図をくみとり、自分がどうすればいいのかを理解しました。

アルスは王様はもしかして大物なのかもしれないと思いはじめています。

――ピロポロリン。

その時王の間に携帯の着信音が鳴りひびきます。

アルスはあわててポケットからケイタイを取り出しました。

『リリアちゃん　メール一件受信』

アルスに連絡をよこした人物の名前が画面に表示されます。いま一番見たくない相手でしたがメールだったのでアルスはほっと一息つきます。

彼はいつもバイブ設定にしていますが、危険人物からの着信にはすぐ気づけるように音を鳴らすよう設定しているのです。

なぜならこの前リリアからの着信に気づかずにいたら、出あいがしらに目つぶしをくらったからです。

アンナからの電話を無視していたら、部屋を荒らされ色々なものを失いました。

メールといってもあまり油断はできません。リリアからとなると、五分以内に返信しないとあとでなにを言われるかわかったものではないのです。

アルスは震える手でメールを確認します。

『さっきはごめんね。気が付いたらアルスがあたしに抱きついてて、すごくびっくりしちゃって思わず……。あたしね、本当はアルスだったら別に……。あ、なに言ってんだろ。やだ、恥ずかしっ。……でね、話があるんだけど、いつものところで待ってるから来てね。ぜったいだよ？（はぁと）』

メールを読み終えるとアルスは返信しようか一瞬まよいましたが、ここは一刻もはやく彼女のもとへ行ったほうがいいと判断し猛ダッシュでお城を後にしました。

リリアの告白です。

いつもの場所。それはアルスのお家からすぐ近くにある公園です。アルスとリリアは家が二軒となりのご近所さん。

二人がはじめて出会ったのもこの公園で、ここにはお互いとても思い入れがあります。いわば二人の思い出がたくさんつまった場所なのです。

アルスはこの公園に足を踏み入れるたび、リリアに半殺しにされた記憶がフラッシュバックしてひざがガクガクいうのです。

リリアは夕陽のさす公園のブランコにこしかけて、ぼんやりと物思いにふけっているようでした。

なんてベタすぎるシチュエーションなんだろう、とアルスは少し笑いがこみ上げてきて、なんとかひざの震えもおさまりました。

全速力で走ってきたアルスは、息を切らしながらリリアに近づきます。

アルスの接近に気がついたリリアは、しずんだ表情から一変、うれしそうに顔をほころばせました。

「あっ、アルス。……うれしい、３分５６秒で来てくれるなんて」

「……ぜえ、はぁ、はぁ、うん、そりゃもちろん、はぁ、はぁ」

やっぱり時間を計られていました。アルスの判断は正しかったの

です。

アルスは息も絶え絶え、となりのブランコにこしかけます。

「……で、話ってなんなのいったい」

そうたずねると、リリアの顔がふたたびかげります。

「……うん、あのね、驚かないで聞いてくれる？　さっきパパとママから聞かされたんだけど、あの、あたしって……、普通の女の子じゃないみたいなの」

「うん、で？」

「うん、って……、驚かないの？　ていうか驚け」

「ええっ！？　なんで？　どういうことなの！？」

こういうときアルスの演技力はかなりのものです。ハリウッド進出も夢ではありません。

「それでね、あたし自分でもまだ信じられなくて、なに言われたんだかサッパリわかってない状態なんだけど……、あたしには魔族の血が流れてるんだって」

「だと思ったよこの怪物」

「え？　いまなんて？」

「たとえ魔族の血が流れていようとリリアちゃんはリリアちゃんだ

よ。僕の大切な幼なじみであることに変わりはないよ」

「ほ、ほんと？　……あたしのこと、キライになったりしない？」

「危険だから明日から半径五メートル以内に近づかないようにしよっと」

「ん？　いまなんか言った？」

「もちろんだよ！　キライになんてなるわけないよ！」

「アルス……。ありがとう」

そう言うとリリアは、こんどは恥ずかしそうにしながら言葉をつぎます。

「でね、さっきいきなりこんなこと言われて、パニックになって家を飛び出してきちゃったからパパとママに顔合わせづらいし、家に帰りづらいの。だから今日は、その、……えとね、……アルスと一緒にいたいな」

「ごめん、今日はちょっとＰＳＰが……」

「おねがい、一緒にいて？」

リリアがかわいいおねだりモードに入ります。これをやられるとやはりアルスも弱いのです。

上目づかいのうるうるした青い瞳。まだ幼さの残ったかわいらしい顔立ち。彼女は見た目だけならアルスのどストライクなのです。

「わ、わかったよ。しょうがないなあ……」

少し照れつつもアルスは視線を宙にさまよわせながら答えます。

リリアはそれを聞くとにっこりして立ち上がり、後ろからアルスの背中にもたれかかりました。

アルスは背中に柔らかなあたたかさといい匂いをかぎとります。とてもいい雰囲気が二人を包んでいます。

はたから見る人にリア充爆発しろ！　と罵られんばかりです。

そこで、今ならいけるかもしれない、とアルスがポケットから取り出したのは、王様からもらった一万ゴールド紙幣。

「はい、これ」

「なぁに？　どうしたのそのお金？」

「王様がこれでリリアちゃんの脱ぎたてパンツをもらって来いっうごあああああ絞まってる！　絞まってる！　これ以上ないぐらいキマってぅぅぐぐ」

「さっきまではスルーしててあげたけどあんたなんでさぁ！　そうやってムードぶち壊しにするようなこと言うわけ！？　しかもなに？　あんたさっきＰＳＰ優先にしようとしたよね？　頭おかしいんじゃないの！？」

背後から絡み付いたリリアの腕がアルスの首をギリギリ締め上げ

ます。

「ちょ、ちょっ、さ、三回目は、まずいって……、あ、もう、い、意識が……」

早くもアルスが成仏しそうだったので、リリアは腕の力を緩めます。

以前、一日に三回アルスを教会送りにした時はさすがにリリアも両親からこっぴどく怒られたのです。

「ったくもう！　言っとくけど一万なんてはした金じゃ売らないわよ」

「売るんだ！　もっと高かったら売るんだ！？」

「うっさいわね、冗談よ！　だいたい男なら正攻法で女の子のパンツぐらい脱がしてごらんなさいよ！」

「えっ？　それはつまりお風呂に入ったところを見計らって、脱衣所に忍び込んで盗めってこと？」

「どこが正攻法なのよ！　思いっきり犯罪じゃない！　あたしが言ってるのはほら、さっきみたいにもっとこう二人でいい感じになって、それで……ってなに言わせんのよ！　このスケベ！」

「えっ！　さっきのままいったらリリアちゃんここでパンツ脱ぎだしたの！？　それ露出狂じゃん、変態だよ！」

「なっ、なんですって！　こっ、こんのガキ！」

機械のように絞り上げられるアルスの首。

やがてアルスの口から、彼の魂が搾り出されていきました。

長い長い一日でした。

再び王の間に戻されたアルスは、まわりから「またかよ……」という感じの冷めた視線を一身にあびました。ハンパではないアウェイ感。笑われているうちはまだマシだったのです。

さすがの王様も今度は何もくれませんでした。

それどころかさっきの一万ゴールドを三万ゴールドにして返すよう要求してきました。

リリアにしっかり一万ゴールド紙幣を持っていかれたアルスは、やっぱりこいつカスだと思い返しました。

もしかしたらあとでドラゴンキラーとクリスタルの盾の代金も要求してくるかもしれません。

あたりはすっかり薄暗くなったお城からの帰り道。家に向かう道の途中、アルスは一人ため息をつきます。

「今日はさんざんな一日だったなあ……。せっかくの日曜日だったのに。明日はもう学校か……。はぁー」

彼は、自分が勇者になった事をすっかり忘れていました。

◇　　◆

「アルス、今日はあなたに重大なお知らせがあります」

家のリビングに入るやいなや、アルスは夕食の準備をしていたエプロン姿のアンナに捕まりました。なにやら真剣な顔をしています。

ですがその母親の姿を見て、アルスはあることを思い出します。

「母さん、あした家庭科の調理実習でエプロン使うから用意しておいて」

「あらそう、わかったわ。……アルス、あなたの中にはね、竜族の血が流れているのよ。ついでに魔族の血も」

「うわっ、そうなのか～。ふ～ん……ねえ、それよりＰＳＰは？」

「サガワが明日になるって。それで、実はあなたのお父さんは前の魔王を倒した後、そのまま北のほうで代わりに今の魔王をやっています」

「明日か～、くそ～。あっ、母さんまさか僕のＰＳ３初期化してないよね？　僕逃げてないからね！」

「初期化はしませんでしたが、無様な姿をさらしたので一部のセーブデータを消しました。あとお母さんは大陸一の甘いマスクと呼ばれるお父さんに言い寄られて世俗に堕ちた哀れな竜族の娘です。竜に変身できますし、めっちゃ強いです」

「なんてことするんだよ！　なに一部って！　ヘンに希望与えないでよ！　うあーもうサイアクだよ……」

「最悪なのはこっちです。さっきお母さんは恥ずかしくて他人のフリして逃げたんですよ？　それで、あなたは魔王の城で調子こいてハーレムを作ろうとしている父アレルを私に代わってシバきに行くのですよ。……アルス、ちゃんと聞いてますか？」

「ちゃんと聞いてるよもう。面倒くさいなあ。要するに父さんが浮気して、ただの夫婦ゲンカでしょ？　母さん自分で行けばいいじゃん」

「あなたの前では仲良し夫婦を装ってきましたが、本当はすぐにでも八つ裂きにしてやりたいレベルです。ですがお父さんとお母さんがマジバトルしたら多分世界は巻きぞえをくって崩壊します」

「でもそれ、僕が行ってもしょうがなくない？　そんなんじゃ父さんにかなうわけないじゃん」

「いえ、あなたはお父さんに超気に入られてますから、それを踏みにじるような発言をしてビンタの一つでもかましてくればいいのです。相当なダメージになるはずです」

「そうかなあ……。僕にも何の連絡もないし、そんな風には思えないなあ。そもそも最後に会ったのっていつだっけ……」

「もちろんお父さんにはあなたの携帯番号と偽ってネットの掲示板に張られていた適当な番号を教えました。ちなみにあなたに送られてくるお父さんからの贈り物は全部捨てています」

「なんてことするんだよ！　全然知らなかったよそんなの！　いつも通販の箱とか言ってたの全部そうだったの！？」

「そういえばその中にＰＳＰもありましたね。全色ありましたが全部売りました」

「うわああっ！　この人でなし！」

「どれだけ金をもてあましてるんでしょうねあの男は。まったくこんなクソガキのどこがかわいいのやら……」

「いまクソガキって言わなかった？　僕のこと」

「いいえ、あなたはとてもかわいいですよ。さっき決闘した時も集まってきていた年上のお姉さん達が『あの子かわいくない？』などとウワサをしていました。お父さんに似て顔のつくりだけはとても優れているようですね。私に全然似ていないのが腹立ちますが」

「そんな、母さんだって十分美人だよ」

「上から目線が気に入りませんがまあいいです。私もアルスくんファンクラブでいろいろ稼がせてもらってますから」

「え！？　なにそれ！？　なんかすごい嫌な予感がするんだけど！」

「アルス、今夜はあなたの好きなカレーよ！」

「やったあ、僕大盛りね！」

こうして、アルスが勇者となった長い長い一日は終わりを告げました。

長い長い一日でした。（後書き）

ごめんなさい。全然冒険してないです。それに今後もしないかもしれないです。

出発です。

「アルス、気をつけていくのよ」

「うん。わかってる。行ってきまーす」

アルスは母親に見送られ、勢いよく玄関を飛び出します。アンナに用意してもらった青い服に赤いマントという勇者ルック。

白い道具袋を肩にかつぎさっそうとアルスが出発した後、アンナは夫アレルの住む魔王城にいたずらＦＡＸを始めました。

『この早漏！』とか『ヤリチン！』とかかなり低レベルなやつです。ですがこれは彼女の日課になっていて、今更やめるわけにはいかないのです。

「ああ……やっぱりアルスを行かせてあの男に取られでもしたら……。どうしたらいいのかしら……」

一人悩むアンナ。そんなことは知るよしもなくアルスはいつもどおり学校に向かったのです。

◆　　◇

「あ、アルスおにいちゃーん！」

アルスは家を出てすぐ、道ばたで誰かに声をかけられました。もちろんアルスにはその声の主が誰なのかわかっています。

こうやって声をかけられるのを毎日楽しみにしているぐらいなのです。

「おはよう、ルナちゃん」

にこにこと上機嫌にあいさつをするアルス。相手は可愛らしい女の子。アルスはあまり背の高い方ではありませんが、そんな彼よりもずっと小さな子です。

とととと、と走りよってくるとくりくりの青い目でアルスを見上げてきます。

「おはようです。あのね、大変なのです。おねえちゃん昨日からちょっとおかしくて、それで部屋から出てこなくなっちゃったんです。このままじゃ遅刻しちゃうよぉ」

一束結わえられた髪の毛をぴょこぴょこせわしなく揺らしながら、ショートヘアの少女は言います。

アルスはその様を見ながら、ああ、なんてかわいいんだろう、とひとりにやついています。このロリコン予備軍はほとんど話を聞いていません。

「聞いてます？　とにかくおねえちゃんが大変なんですっ。アルスおにいちゃん、おうちにきておねえちゃんとお話してあげて」

ルナはリリアの四つ下の妹です。彼女がおねえちゃんと連呼しているのはリリアのことなのです。

「えー、どうでもいいよあんなやつ」

昨日三回お城送りにされたのです。リリアには寛大なアルスも嫌気がさしていました。

「ど、どうでもいいって……そんな……」

その発言を聞いたルナは一気に泣きそうな顔になります。彼女はとても純真な優しい子で、アルスとリリアが仲良くしていないとイヤなのです。

「あっ、うそうそ、じょうだんだよ。じょうだん。よーし、僕が行ってすぐお姉ちゃんを元気にしてあげよう！」

アルスはルナにはとても弱いです。

第一にルナがかわいいというのもありますが、彼女はなぜかすごい魔法を使えて、泣き出すとみさかいなく強力な魔法を乱発しだしていろいろ危険なのです。

当然アルスは何度も教会送りにされています。地獄の業火で消し炭にされた時は神父さんにも「うわぁ……」って言われました。

見知らぬ街まで全裸で吹き飛ばされた事もあります。本人に悪意があるわけではないのである種リリアよりもタチが悪いのです。

アルスはきびきびとした動きで近くのリリア宅へ向かいました。

◆　　◇

「あんた、だからまだ早いって言ったじゃないの！」

「お前それはアルス君が勇者になる日にあわせてだな……」

アルスが玄関をまたぐと、居間からリリアの両親の言い争う声が聞こえてきました。母のマーベルが一方的にヒートアップしている感じです。

アルスはこの二人が苦手なので、リビングには向かわずこそこそと二階のリリアの部屋に上がろうとします。もう勝手知ったる家です。ですがルナがそれを許しませんでした。

「おとーさん、おかーさん、アルスおにいちゃんが来てくれたよ！これでおねえちゃんも大丈夫だね！」

「なにっ！　アルス君が！」「ええっ！　アルス君が！」

そろって大きな声を上げた二人は、どたどたとアルスの前にやってきました。アルスは仕方なくあいさつをします。

「あ、……どうも、おじゃまします」

「アルス君！　最近どうしたんだね、めっきり遊びに来なくなって！　何が気に入らないんだ、リリアのスカートが長すぎるのか？それとも君の属性が変わったのかね？」

「リリアちゃんはもういいのでルナちゃんのほうを……」

「アルスくん、この前の話考えてくれた？　お婿に来てくれるって」

「僕の一存ではなんとも……」

「おいおい、それはまだ早いだろう」

「いいえ、本来この子は私が産むはずだったのよ、何の問題もないわ」

「なにぃ、お前それはどういうことだ！」

「うるっさいわね黙りなさいよ。……アルスくん、アンナとかいうクソババアのことなんて気にする事はないのよ？」

アンナとマーベルの仲はすこぶる悪いのです。なんでもその昔アレルとマーベルに関係があったとかないとか。

「おいおい、アルス君の前でなんてこというんだお前は」

「何よ悪い！？　この前郵便受けに聖水が大量に突っ込んであったの絶対あのオンナの仕業よ！　陰湿な嫌がらせよ、魔物は消えろといわんばかりの！」

アルスはギクリとしました。この前アンナが聖水を箱買いしてきたのを見つけてしまっていたからです。

「あれなに？」と聞いたら「仕事で使うから触っちゃダメ！」とすごい剣幕で怒られました。アンナは専業主婦なので別に仕事はしていません。

昨日アンナから聞かされたのですが、リリアの両親は彼女同様魔族の血を引いているそうなのです。というかマーベルはモロに魔族の娘だそうです。

「二人ともアルスおにいちゃんのジャマしないで！　はやくおねえちゃんの部屋に行きましょ！」

ルナが両親の猛攻をさえぎって言います。アルスもあまり絡みたくないのでそのスキにさっさと二階へと上がっていきました。

リリアを説得します。

リリアの部屋の前。中はしーんと静まりかえりドアは固く閉ざされています。

アルスはためしにコンコンとノックしてみましたが、何の反応もありません。

「おねえちゃん鍵かけちゃって、なにを言っても出てこないの。どうしよう……」

「え？　ドアをけやぶって無理やり引きずり出せばいいんじゃないの？」

「だ、だめだようそんなの。ここはね、おもわずおねえちゃんがドアを開けたくなるように、アルスおにいちゃんがやさしくあま～い言葉をかけてあげて」

アルスははやくもうんざりしましたが、ルナが期待のまなざしでじっと見つめてきます。

……う～ん、なんて言えば……。自分が魔族の血を引いているっていうのまだ気にしてるのかなぁ、それなら……。

意を決したアルスはドアに向かってゆっくり声をかけます。

「リリアちゃんが魔族の血を引いているって聞いて安心したよ。僕はてっきりもっと別次元の生命体かと思ってた」

ガチャッ！　ガズッ！　バタン！

目にもとまらぬスピードでドアが開き、アルスが殴られ、ドアがまた閉まりました。

「……いま、ドア開いたよね？」

鼻血をたらしながらアルスが確認を取ります。

「え？　わからないです……、あれ、鼻血？」

そのあまりの素早さにルナは気づいていません。まばたきをしたら見逃してしまうほどの一瞬だったのです。

「……うん、次はよく見ててね」

アルスは鼻血を拭うと再び語りかけるようにしゃべりだします。

「昨日の公園での事なんだけど、僕あの後家に帰ってから自分なりに考えたんだ。なにがいけなかったのか。それでやっとわかったよ。あの時リリアちゃんは自分からパンツを脱ぐんじゃなくて、強引にパンツを脱がされたかったって事だよね？」

ガチャッ！　ドスッ！　ドガッ！　バタン！

「……ね？　い、今み、見たでしょ……？」

アルスがおなかを押さえながら確認します。

「なにかすごい音がしたね。ルナね、さっきちょっと目にゴミが入

っちゃって……」

「いや開いたって。その音はドアが開いて、僕がボディーに二発もらって、ドアがしまった音だよ」

どうしても決定的瞬間をおさえられません。その時やきもきするアルスの携帯が鳴り響きます。

音が鳴るとアルスはパブロフの犬よろしく光の速さで携帯を確認する癖がついています。

あわててポッケから携帯を取り出し、取り落としそうになりながらも内容をチェック。

すると、

『死ね』

リリアからのメールでした。

「リリアちゃんいつもどおり元気みたいだよ」

アルスは安堵して携帯をしまいます。昨日のようなヘンにかしこまった文面よりこういう一言の方が安心できるのです。

「じゃあどうしてでてこないのかなぁ？」

「だからちょくちょく出てきてるんだって。もういいや、ここは僕が直接……」

アルスがぐっと力をこめるとドアはばきばきっと音を立てて開きました。いや壊れました。

昨日のアンナのビンタで覚醒したアルスの力はそれはもうとんでもないものになっているのです。

アルスはずんずん部屋に入って中を見渡しましたが、誰もいません。おっと、いました。リリアが部屋の隅でうつむきながら体育座りをしています。

またベタなの好きだなぁ……、とアルスは必死に笑いをこらえながら話しかけました。

「リリアちゃん……。みんな心配してるよ？　早く出てきなよ」

リリアは顔をふせたまま小さく声をもらします。

「……もういいの。あたしなんか。昨日一晩中考えて、やっぱりあたし普通じゃないって、気づいた。みんなとちょっと違うなって」

「気づくのおそっ。それにぜんぜん違うし」

ギュオオオオッ！　ズガッ！

高速で動く物体がわずかにアルスの頬をかすめ、壁に突き刺さりました。それはクリスタルの盾。

本来なら顔面直撃コースでしたがアルスは驚異的な反射神経で上体をそらしたのです。

アルスの頬を一筋の血が伝います。リリアにとっては盾すら強力な投擲武器となるのです。

「リリアちゃん、落ち着いて。僕を殺さないで。えーと、魔族の血を引いてるのはなにもリリアちゃんだけじゃないよ。昨日母さんから聞かされたんだけど僕なんて魔族と竜族の血を引いてるんだって」

「えっ！？　ウソ……？」

「ウソじゃないよ。だから僕もリリアちゃんと同じ。安心して」

そういえば母さんの話、もしかしたら全部ウソかもしれないな、とふとアルスの脳裏をそんな疑問がよぎりましたが、さすがにそこまでイっちゃってるこ

とはないだろうと思い返します。もしそうなら一刻も早く自分の母を病院に連れて行かなくてはなりません。

「アルスもあたしと同じ……？」

「そうだよ」

「そ……そうだったの……」

ついにリリアが立ち上がり、アルスのそばまでやってきます。近い。二人の距離はかなり近いです。

リリアはアルスの目の前で恥ずかしそうにただうつむいています。

「アルスおにいちゃん、そこでぐっとおねえちゃんの肩をひきよせ

て」

部屋の外から顔をのぞかせたルナが指示を出します。

もちろんリリアにも丸聞こえですが、彼女もまんざらでもなさそうに身をゆだねようとしています。

そしてあたりがだんだんとピンク色の空気に包まれていきます。

ですがその時アルスは新たな事実に気がつきました。思わず声に出してしまいます。

「あれ、そういえばリリアちゃんが魔族の血を引いているという事は、ルナちゃんもそういうことになるよね」

「へ？」

アルスの発言に「おーまかせっ！　おーまかせっ！」とはやし立てていたルナは目が点になりました。

「あ、そういえばそっか」

リリアも今気づいたようにぽろっとこぼします。

「……そ、そんな……」

ルナが呆然とした顔で立ちつくします。抜け殻のようになった顔はやがて、赤く染まりだしぐしゃぐしゃになって……。

あっ、とアルスが気づいた時にはもう手遅れでした。

「いやーーーーーーー！！！」

大声で泣きわめく声とともに、ルナが突きだした両手からエネルギー波のようなものが放たれました。

そのなぜか矛先はアルスです。

ゴォォオオオッ！

謎の破壊光線は目標をいともたやすく貫通し、部屋の窓から飛び出し、空へ向かってどこまでもどこまでも飛んで行きました。

アルスは跡形もなく蒸発しました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7371y/

勇者アルスくんの冒険

2011年12月21日23時45分発行